山梨県北杜市明野町上神取
諏訪原遺跡発掘調査概報
2011年度

2011.12

昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科

例　　言

1．本書は、山梨県北杜市明野町上神取1558-1に所在する諏訪原遺跡の2011年度発掘調査概報である。

2．発掘調査は、2011年８月２日から13日まで実施した。

3．発掘調査は昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科が主体となり、山梨県教育委員会・北杜市教育委員会の指導のもと、昭和女子大学大学院修了生・大学院生・学部学生が参加し実施された。

4．発掘調査は、昭和女子大学大学院生活機構研究科教授　山本暉久・同人間文化学部歴史文化学科准教授小泉玲子が担当した。

5．発掘調査は、独立行政法人日本学術振興会平成23年度科学研究費（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）研究課題名「関東・中部地方における縄文時代中期大規模環状集落崩壊過程をめぐる研究」の補助金（研究代表者　山本暉久）、および、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科2011年度プロジェクト予算「山梨県北杜市諏訪原遺跡の発掘調査を通じた体験型実習の実践」により実施された。

6．2007年度より実施してきた調査対象地区の発掘調査は、本年度の調査をもって終了した。

7．発掘調査により発見された遺物は、現在、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科において保管中であるが、正式な発掘調査報告書が刊行されたあと、北杜市教育委員会に返還する予定である。

8．本調査概報は、調査参加学生の協力を得て出土品整理および実測図面の整理・トレースを行い、山本暉久および大学院修了生・大学院生の原稿にもとづき、小泉玲子と山本暉久がとりまとめた。

9．発掘調査にあたっては、山梨県教育委員会、北杜市教育委員会のご協力をえたほか、下記の方々からご指導いただいた。あつく感謝したい。

佐野　隆（北杜市教育委員会）、菅谷通保、大網信良（早稲田大学大学院）、下島綾美、植月　学（山梨県立博物館）、植月未来、領家玲美（昭和女子大学大学院生活機構研究科博士課程・相模原市教育委員会）、脇　幸生（かながわ考古学財団）、脇　美沙（相模原市教育委員会）、江川真澄（相模原市教育委員会）、阿部昭典（國學院大學伝統文化リサーチセンター）、早勢加菜（アム・プロモーション）、岩井良栄・結城晶子・大森咲子（昭和女子大学ＯＧ）、中泉雄太（駒澤大学大学院）

目　　次

1．調 査 経 緯 ……1
2．遺跡の位置 ……2
3．調 査 経 過 ……3
4．発見遺構と遺物 ……5
5．ま　と　め ……17

挿図目次

図１ 遺跡の位置 ……2
図２ 調査地区全体図 ……4
図３ ＳＷＵ－ＰＪ１号住 平断面図 ……6
図４ ＳＷＵ－ＰＪ１号住 炉址 平断面図 …7
図５ ＳＷＵ－ＰＪ１号住 埋甕 平断面図 …8
図６ ＳＷＵ－ＰＪ２号住 石囲炉址 平断面図 …9
図７ ＳＷＵ－ＰＪ２号住 平断面図 ……10
図８ ＳＷＵ－ＰＪ３号住 石囲炉址 平断面図 …12
図９ ＳＷＵ－ＰＪ３号住 平断面図 ……13
図10 出土遺物 ……16

1．調 査 経 緯

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科は、2007（平成19）年度より、山梨県北杜市明野町上神取に所在する縄文時代中期の集落址である諏訪原遺跡の学術調査を実施してきた。これまでの４次にわたる調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居址３軒、土坑、中世末から近世期と思われる道路状遺構等が確認され、多大な成果をあげることができた。その年度ごとの調査結果の概要については、別にそれぞれ報告済み（昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科編 2007・2008・2009・2010）である。

昨年度の調査では、ＳＷＵ－ＰＪ３号住の柱穴調査が半截段階で終わったことや、石囲炉址の内部調査も未着手のままで終わったことから、2011年度も継続調査を実施することとした。しかし、本年に入って、これまで調査を実施してきた地区を含めて、大規模な範囲に土地改良工事が計画されることになり、それに伴い、平成23年度より北杜市教育委員会による事前の記録保存調査が実施されることとなった。その結果、設定した調査地区南側のＡ～Ｃ－８～12グリッド（図２参照）は、北杜市教育委員会が調査を実施することとなった。このような経緯から、これまでの調査対象地区は、今年度が最終年度の調査となることとなった。

調査の対象地は、諏訪原遺跡が所在する上神取集落内の上神取1558－1番地（土地所有者　村田勝海）の約700㎡である。この調査対象地は、かつては養蚕のための桑畑であったが、現在は桑栽培は放棄され、2007年の調査開始前は雑草地となっていた。

調査にあたっては、本年度は、独立行政法人日本学術振興会平成23年度科学研究費（学術研究助成基金助成金）基盤研究（Ｃ） 研究課題名「関東・中部地方における縄文時代中期大規模環状集落崩壊過程をめぐる研究」の補助金、および昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科2011年度プロジェクト予算「山梨県北杜市諏訪原遺跡の発掘調査を通じた体験型実習の実践」により実施することとなった。科学研究費補助金代表研究者である山本暉久が調査全期間を科学研究費により統括しつつ、調査期間約２週間を前半と後半に分けて、前半は科学研究費補助金による調査を実施し、後半はプロジェクト予算により実施することとした。

今年度の調査は、夏季休暇期間を利用して、８月１日～14日の予定で調査を実施することとなった。参加学生は、本年度から大学院・学部３・４年の考古学ゼミ生に加えて、１・２年生を対象として、５月当初に参加希望者を募り、応募のあった学生から選抜して参加させることとした。このような経緯を経て、土地所有者の村田勝海氏の承諾をえて、北杜市教育委員会の指導のもと、発掘調査に至ったものである。

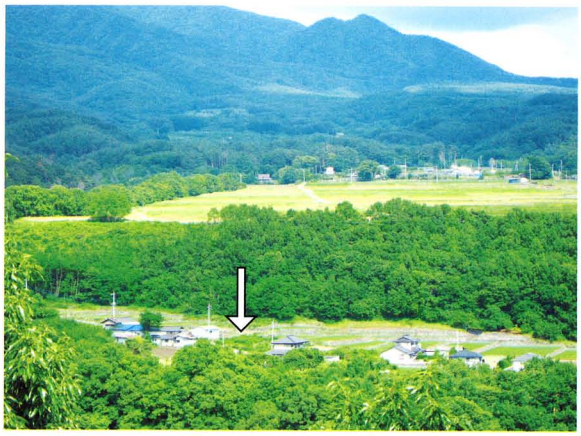


写真１　遺跡遠景　塩川右岸から

写真２　発掘再開前の現況　2011.8.4

2．遺跡の位置

遺跡は、山梨県の北方に位置し、山梨県北杜市明野町(旧・北巨摩郡明野村)上神取1558-1番地に所在する(図１)。標高約550m、塩川左岸の河岸段丘面に広がる遺跡で、東側には標高1700mを越す茅ヶ岳・金ケ岳の雄大な山麓が広がり、北西には八ヶ岳山麓、南西方向には、南アルプスの山々が望まれる風光明媚な場所に位置している。これまでの調査結果によると、「茅ケ岳山麓でも最大級の規模を誇る」とされ、「遺跡の広がりは２万㎡以上におよび、100軒を優に超える住居址が埋蔵されていると考えられる」(佐野　1996)、縄文時代中期の大規模な拠点的環状集落址である。

養蚕業不振により桑の栽培が放棄され、それに変わって、畑地への転化や宅地化が進みつつあり、そうした状況の中、桑の抜根による遺跡破壊に対処することを目的として、明野村教育委員会により、1992(平成４)年から2003(平成15)年にかけて８次にわたる発掘調査が断続的に行われてきた(佐野　1996・2003・04)。

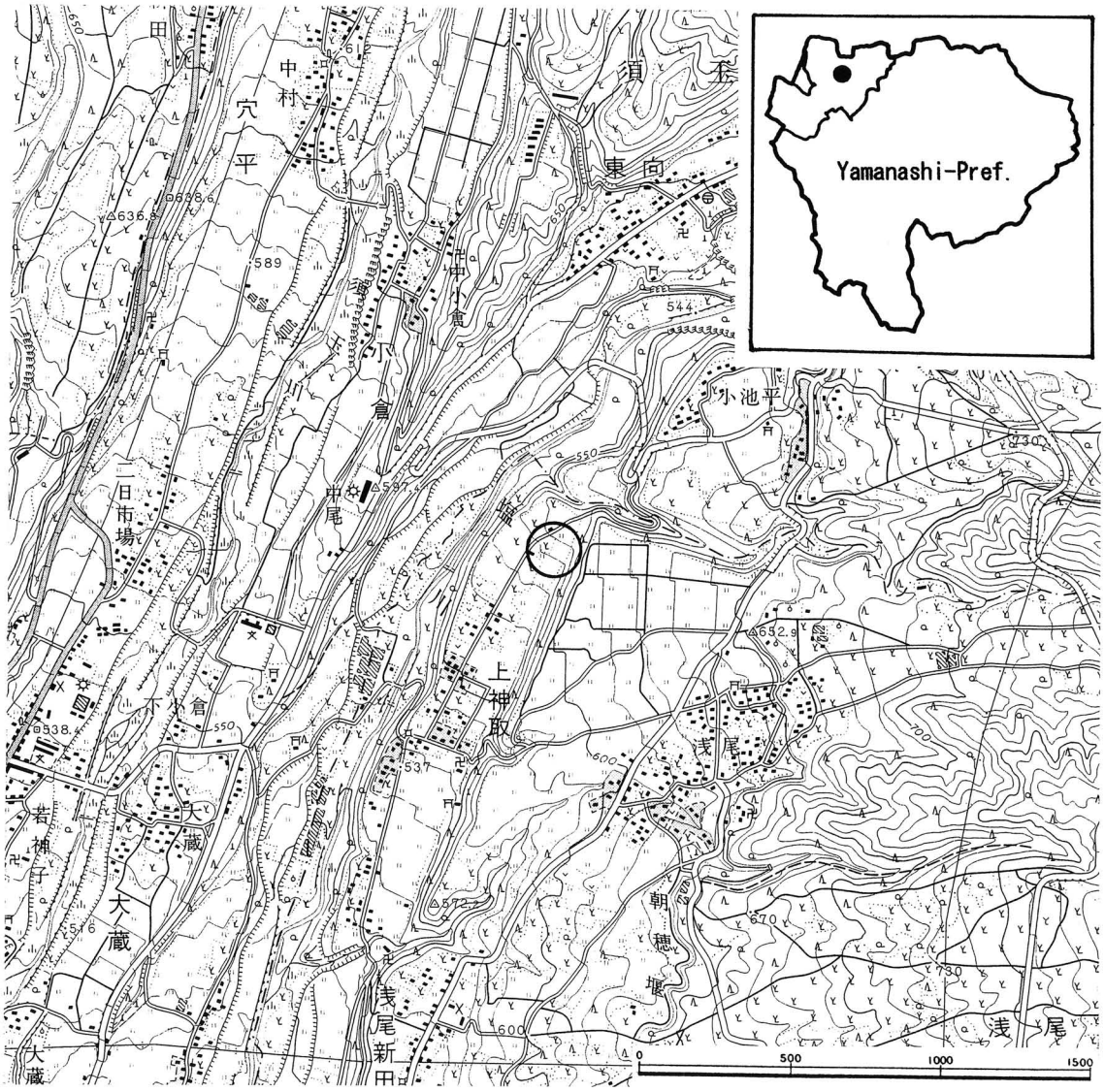


図１　遺跡の位置　1/25,000

３．調 査 経 過

調査はまず、昨年度の調査の埋め戻し土の除去から開始した。今年度の調査が最後となるため、埋め戻しに用いた土嚢を調査区からすべて除去し、土嚢袋から土砂を排出する作業を行った。その後、調査区を清掃し、検出されている３軒の竪穴住居址の完掘を目指して、ＳＷＵ－ＰＪ１号住の北側のＣ・Ｄ－５グリッドに東西７ｍ×南北1.5m、東側のＤ－６グリッドに南北５ｍ×東西1.5mの拡張区、ＳＷＵ－ＰＪ２号住の北側、Ａ～Ｃ－５グリッドに東西６ｍ×南北1.5mの拡張区、ＳＷＵ－ＰＪ３号住の南側、Ｂ・Ｃ－８グリッドに東西６ｍ×南北0.5mの拡張区を、それぞれ設定した(図２・写真２)。

ＳＷＵ－ＰＪ１号住は、昨年度の調査により、調査範囲のほぼ全域は調査完了していたが、今回拡張した結果、住居プランのほぼ全体を明らかにすることができた。また、東壁の周溝中から、口縁部と胴部を打ち欠いた埋甕が検出され、この住居址の構築時期が確定できたことは大きな収穫であった。

ＳＷＵ－ＰＪ２号住は、北側を拡張して調査したところ、これまで確認されていた面よりやや高い面から、大形の石囲炉が検出された。このことから、これまで調査してきた面は床面を掘りすぎていたことが判明した。この石囲炉をもつ住居プランに複雑に土坑等が重複していたものと思われる。石囲炉の内部を調査したところ、小形の深鉢形土器が出土し、この住居址の時期がほぼ判明した。

ＳＷＵ－ＰＪ３号住は、昨年度調査が半截のまま中途に終わっていた柱穴の全截を行い、石囲炉の調査、周溝等の調査を行い、プラン全体の調査を完了することができた。Ａ－７グリッドの１号道状遺構の下面調査もあわせて行ったが、土坑等の落ち込みは確認されなかった。

期間中ほぼ天候に恵まれ、順調に調査を遂行することができ、８月13日に調査を終了した。　(山本暉久)

写真３　調査風景　2011.8.6

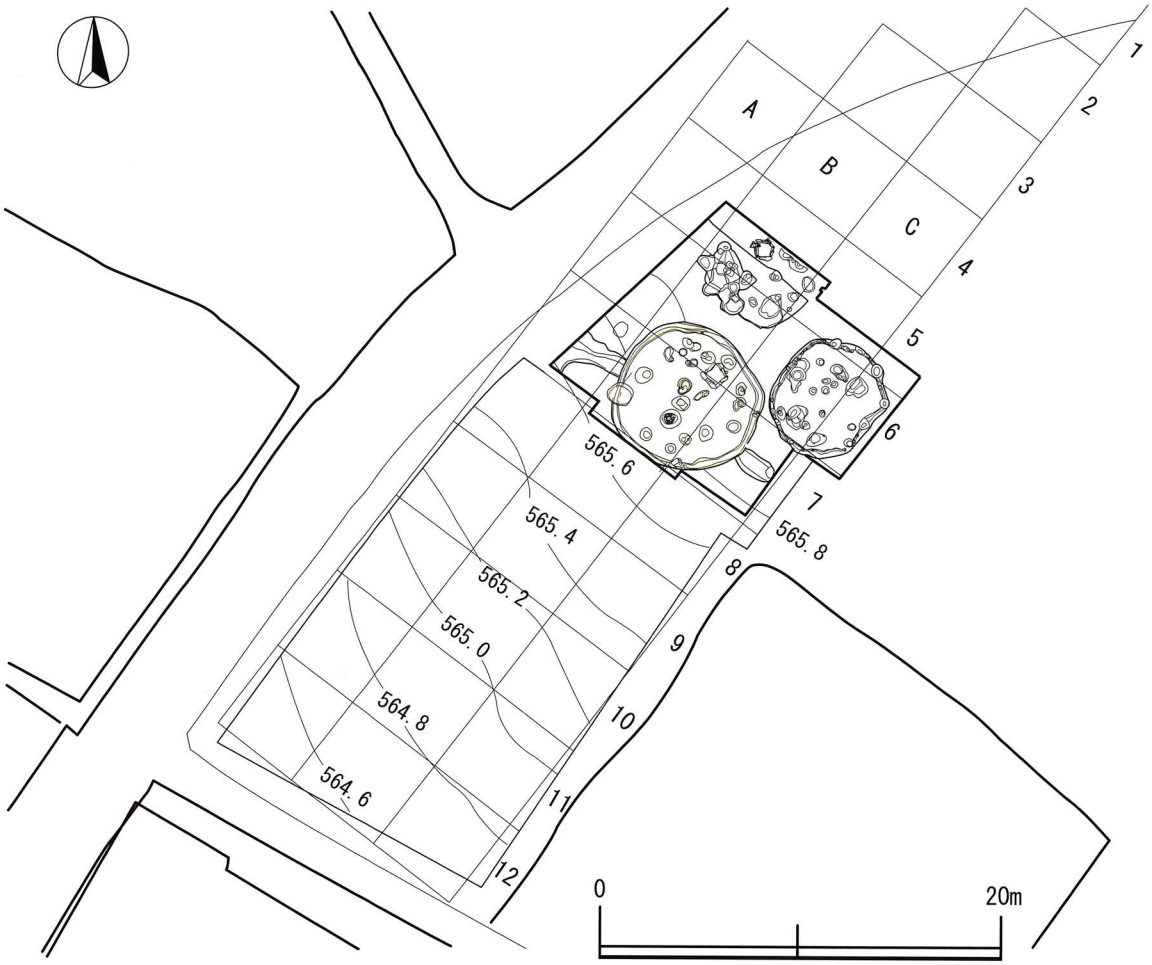


図２　調査地区全体図　1/400

写真４　調査風景　2011.8.13

４．発見遺構と遺物

ＳＷＵ－ＰＪ１号住(図３・４・10、写真５～10・16)

本住居址は、昨年度の調査で住居址の壁溝を一部検出したことにより、調査対象範囲の調査を完了していた。しかし、今年度に入り、隣接地域が土地改良工事に伴う事前調査が実施されることとなり、調査区をさらに拡張し、住居址の全体のプランを明らかにすることが可能となった。

まず昨年度の調査区壁からＣ・５グリッドへ北に1.5ｍ×７ｍ、Ｄ－６グリッドへ東に1.5ｍ×5ｍの範囲を拡張し、表土の掘り下げを行なった。2008年度の調査で設定した土層断面のポイントより東へ1.3ｍ、30cm幅の土層観察用ベルト追加設定し土層観察を行なった。

調査の結果、住居址の壁、周溝を検出し、住居址全体のプランが明らかにすることが出来た。住居址の規模は長軸約7.1ｍ×短軸5.3ｍの六角形状を呈する。住居址南側の壁際周溝にかかって、口縁部と胴下半部を打ち欠いた状態で埋設されていた埋甕が検出された(図５、写真８～10・16－１)。掘り込みは床面から約30cm下で礫層となるが、その底面に正位で状態で埋められていた。出入口部に埋設されたものと考えられる。

周溝は、埋甕の埋設部分を除き全周している。また今年度の調査で新たにＰ15を検出した。Ｐ15は長径40cm×短径37cm、深さ約70cmを測る。また、これまで、炉址の存在が不明であったが、昨年に調査を行なったＰ2・12から焼土が検出されていることから、これが地床炉ではないかと判断された(図４)。

住居内の調査、図面作成、全体写真を撮り終えた後、埋甕の掘り方を半截し土層断面図を作成後、埋甕の取り上げを行なった。埋甕は、残存部上端の径約30cm、現存高約22cmの大きさをもち、口縁部と胴下半部が打ち欠かれている。胴上半部がやや胴張りする器形を呈し、文様は、頸部に横走する隆帯を貼附し、Ｘ状の隆帯を位置を変えて二段に貼り付けている。胴部は隆帯により縦位に渦巻き文を施し、内部は列点文を充填し、それ以外は無節Ｌの斜縄文が施されている。中期後葉・曽利Ⅰ式期に相当しよう(写真16－1、図10－1)。

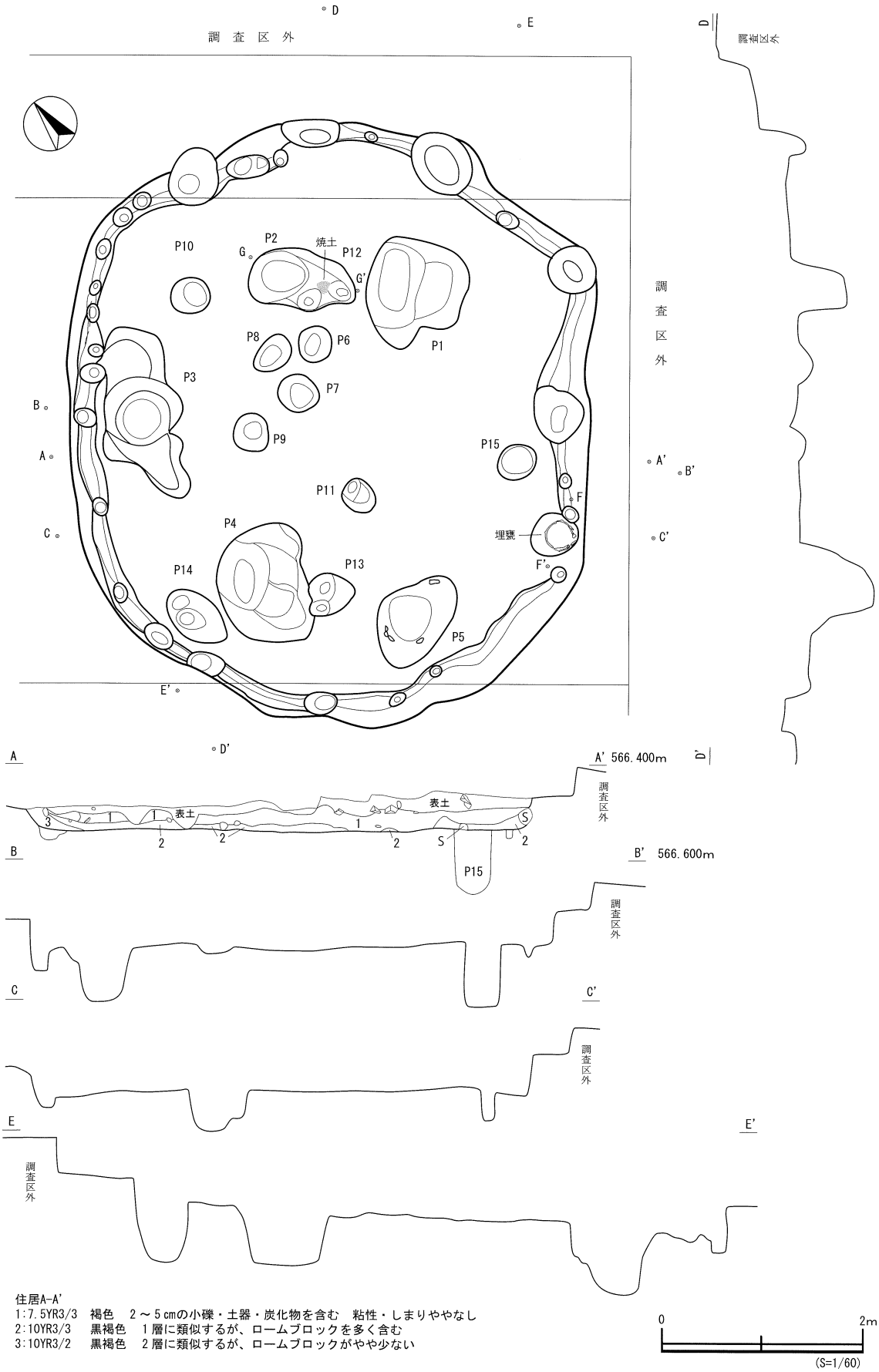
他に住居址の東南側から蛇紋岩製の小形磨製石斧が出土している(写真16－7)。大きさは長辺約5.7cm、幅3.5cmを測る。他に土器片のほかに黒曜石の剥片、打製石斧、磨石などが出土している。

第１次調査において覆土層に多量の礫石や丸石を伴う住居址が確認されて以来、調査を継続してきたが、本年度の調査において完掘するに至った。埋甕の出土によって住居址の時期が明らかとなり調査を終了することが出来たことは大きな成果といえよう。

(大野節子)

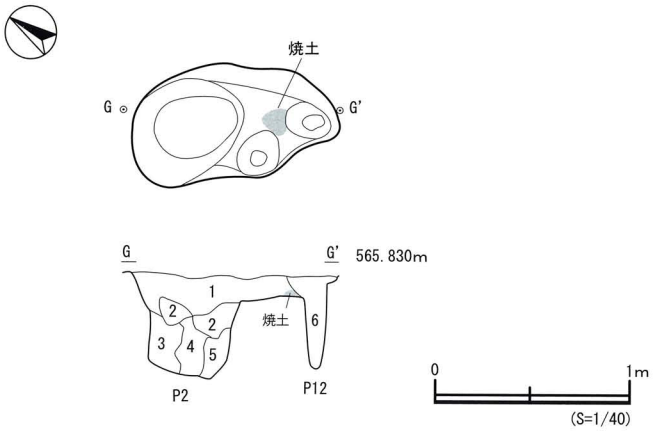
写真５　ＳＷＵ－ＰＪ１号住調査風景

写真６　ＳＷＵ－ＰＪ１号住　測量風景



住居A-A'
1:7.5YR3/3　褐色　2～5㎝の小礫・土器・炭化物を含む　粘性・しまりややなし
2:10YR3/3　黒褐色　1層に類似するが、ロームブロックを多く含む
3:10YR3/2　黒褐色　2層に類似するが、ロームブロックがやや少ない

図３　ＳＷＵ－ＰＪ１号住 平断面図(1/60)



P2・12　G-G'
1:10YR2/2　黒褐色　炭化物・焼土１%含む、粘性・しまりややあり
2:10YR4/6　褐色　　１～３mmの白色粒３%含む、粘性・しまりあり
3:10YR3/3　暗褐色　黒色土ブロック１%・黒色粒５%、粘性・しまりあり
4:10YR3/3　暗褐色　３層に類似るすが黒色ブロックを含まない、粘性・しまりあり
5:10YR3/3　暗褐色　４層に類似するが４層より強くしまっている、粘性・しまりあり
6:10YR4/4　黒褐色　白色粒・炭化物１%含む、粘性・しまりあり
焼土:2.5YR4/6　赤褐色　粘性・しまりあり

図４　ＳＷＵ－ＰＪ１号住　炉址(Ｐ２・12) 平断面図(1/40)

写真７　ＳＷＵ－ＰＪ１号住　西側から

写真８　ＳＷＵ－ＰＪ１号住　埋甕半截状態

写真９　埋甕堀り方

写真10　埋甕半截断面

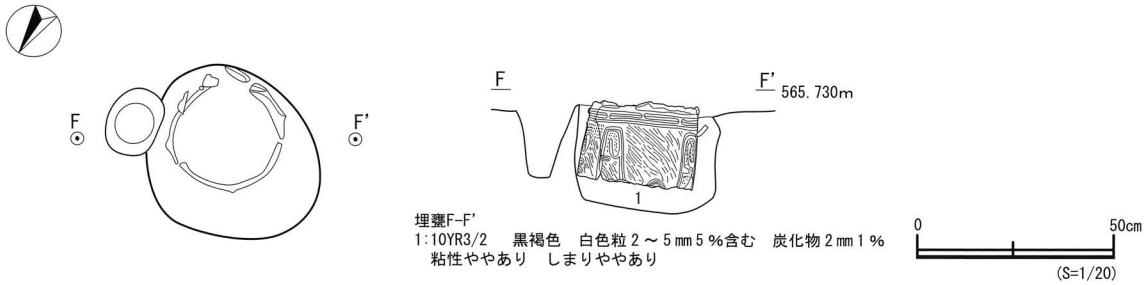


図５　ＳＷＵ－ＰＪ１号住　埋甕　平断面図(1/20)

ＳＷＵ－ＰＪ２号住(図６・７・10、写真11・12・16)

本住居址は、昨年度の調査で終了としていたが、今年度、土地改良工事に伴い調査可能範囲が広がったため、北側に1.5×７ｍ拡張して調査を実施した。表土から50cmほど掘り下げたところで、一辺約65cmのほぼ正方形を呈した石囲炉が検出された(写真12)。これは、これまで確認されていた面より約20cm高い位置であった。このことから、これまで調査してきた面は床面を掘りすぎていたということが判明し、2008年度の調査で出土した器台形土器とその近くに置かれた卵形の石は、ほぼ床面上に相当する位置に置かれていたものと判断された。また、石囲炉の内部から、ほぼ完形の小形深鉢形土器が出土した(図10－2、写真12・16－2)。時期は、曽利Ⅱ式期のものと思われる。石囲炉の底面には、段丘礫層が認められ、この面がほぼ炉の堀り方底面と考えられる。今年度は新たに、Ｐ７～Ｐ11を確認した。Ｐ７は今までの検出面で確認され、長径約70cm×短径約50cmの楕円形を呈し、最大深度は45cmほどの、テラスを有するピットである。Ｐ８は拡張した住居の西側から検出し、長径約80cm×短径約60cmで、最大深度約15cmの擂鉢形を呈する。Ｐ９～Ｐ11は調査区の範囲外に広がっているため、半分しか調査できなかったが、これらのピットは３つ連なって検出された。Ｐ９は東西に約50cmで最大深度が約40cm、Ｐ10は東西約30cm、最大深度約50cm、Ｐ11は東西約40cm、最大深度約70cmである。Ｐ８以外は柱穴であると考えられ、過去の調査で検出されたピットを含めて位置関係をみてみると、Ｐ１、Ｐ２(昨年度の４号土坑の一部を新たにＰ２とした)、Ｐ４、Ｐ６、Ｐ７、Ｐ９、Ｐ10、Ｐ11、Ｐ12(昨年度の２号土坑をＰ12に変更)、Ｐ13が、本住居址の主柱穴であると考えられる。本住居址の所属時期は、石囲炉内の土器やこれまでの出土遺物から判断して、中期後葉曽利Ⅱ式期と思われる。

今年度の調査の結果、現状では、東西約６ｍ×南北約４ｍの範囲が調査することができた。北側の未調査範囲を含めると、ほぼ径６ｍほどの円形プランをもつ住居跡と考えられる。西側の複雑に重複したピットや土坑は、本住居址の下にある、別の遺構と考えられる。本調査区の北西部分は礫が多く、ピット等の遺構は確認できていない。しかし、今回の調査で北側を拡張したことにより石囲炉が検出され、住居のほぼ全容を明らかにできたことは、大きな成果といえよう。

(鑑田夏実)

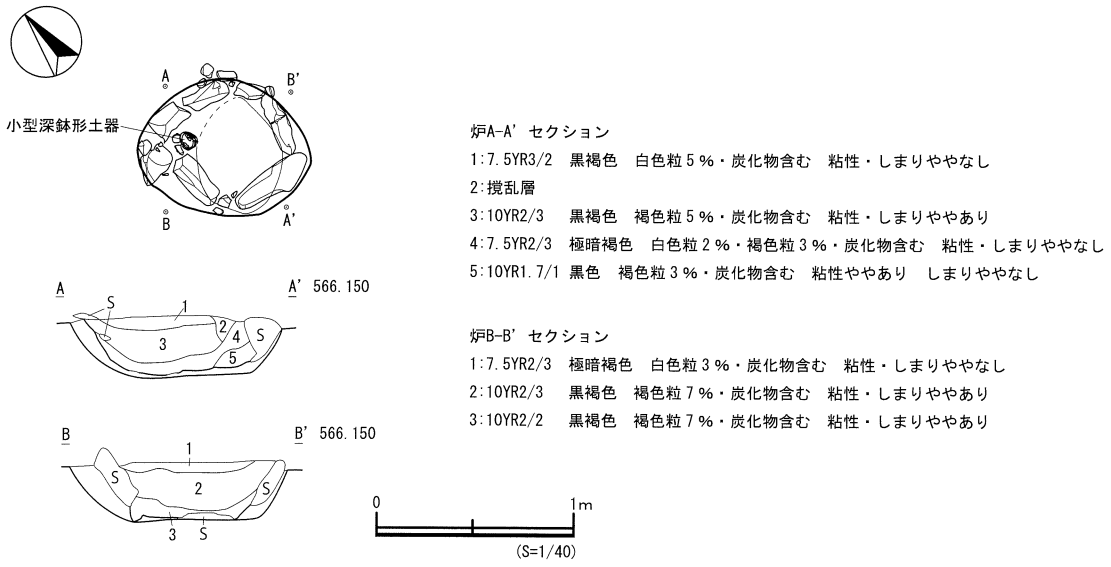
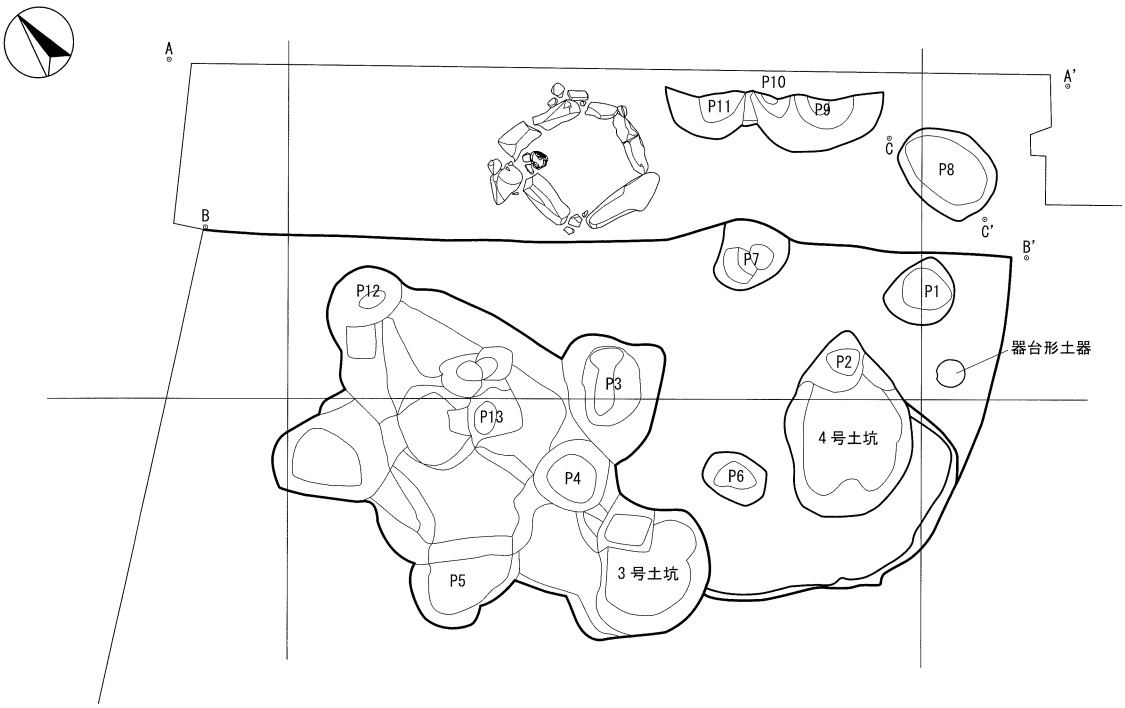
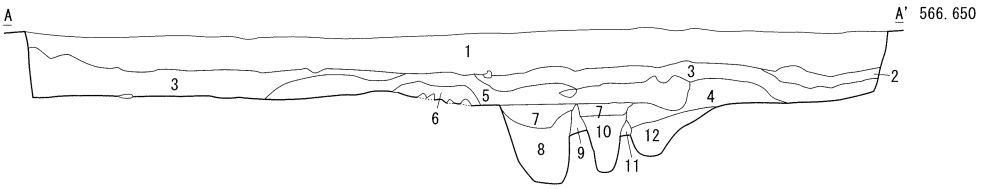


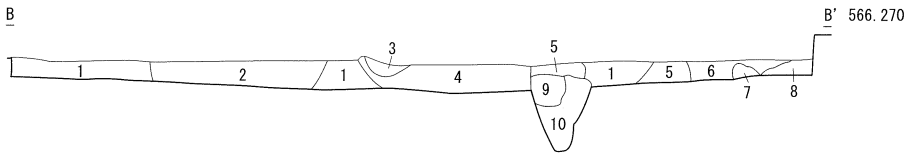
図６　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　石囲炉址 平断面図(1/40)





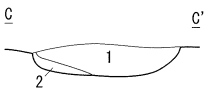
A-A'

1:表土・撹乱層
2:10YR4/4　褐色　白色粒７%含む　粘性・しまりややあり
3:10YR3/4　暗褐色　ローム含む　粘性ややなし　しまりあり
4:10YR2/3　黒褐色　小白色粒３%含む　粘性ややなし　しまりあり
5:10YR3/4　暗褐色　粘性・しまりあり
6:10YR2/3　黒褐色　黒色土含む　粘性・しまりあり
7:10YR3/3　暗褐色　ロームブロック含む　粘性ややなし　しまりあり
8:10YR2/3　黒褐色　炭化物含む　粘性あり　しまりややあり
9:10YR2/3　黒褐色　粘性ややなし　しまりあり
10:10YR2/3　黒褐色　白色粒含む　粘性あり　しまりややなし
11:10YR3/4　暗褐色　粘性・しまりあり
12:10YR4/4　褐色　粘性なし　しまりあり



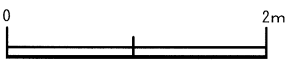
B-B'

1:2.5YR4/6　オリーブ褐色　白色粒３%含む　粘性・しまりなし
2:礫層
3:10YR4/4　褐色　粘性・しまりややなし
4:10YR4/6　褐色　白色粒３%含む　粘性ややなし　しまりあり
5:10YR3/4　暗褐色　白色粒５%含む　粘性ややなし　しまりややあり
6:10YR3/4　暗褐色　ローム含む　粘性ややなし　しまりあり
7:10YR2/3　黒褐色　白色粒５%含む　粘性ややなし　しまりあり
8:10YR3/4　暗褐色　白色粒５%・ローム含む　粘性ややなし　しまりあり
9:10YR2/3　黒褐色　粘性あり　しまりややあり
10:10YR4/6　褐色　粘性ややあり　しまりあり



P8

1:10YR2/3　黒褐色　白色粒７%・ローム含む　粘性・しまりあり
2:10YR3/4　暗褐色　ローム含む　粘性・しまりあり



(S=1/60)

図７　ＳＷＵ－ＰＪ２号住 平断面図(1/60)

写真11　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　南側から

写真12　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　石囲炉址

ＳＷＵ－ＰＪ３号住(図８・９、写真13～16)

本年度の調査は、昨年度に引き続き、ＳＷＵ-ＰＪ３号住のプラン全体を明らかにするため、住居内のピットの完掘、住居南側の壁の確認と周溝の検出を行った。また、本年度は住居址南側のプランを明らかにするために、南側へ0.5×６ｍの拡張区を設定し、壁の確認と床面の追求を行った。その結果、拡張した範囲内で住居の壁と周溝が検出されプラン全体が確認された。

まず、３号住居址の全体のプランを確認するため、まだ明確に検出されていない壁と周溝の調査を行ったところ、昨年度の調査で住居の北東側に検出されていた６号土坑の壁が住居址の壁であったことが判明した。それにより周溝の検出を行いながら壁を確認すると、住居の東側の壁面は昨年度の壁面より50㎝外のラインで確認することができた。その際、黒曜石製の石核(写真16－11)が住居址南東側の覆土中がら出土した。また新たなピットも検出され、このピットの東側からの周溝からは２本の打製石斧が出土した(写真13、 16－5・6)。新たに検出されたピットはＰ16と命名し調査を行った。このピットとＰ15は完掘した結果、昨年度検出されたＰ１やＰ９と似た性質をもっており、住居址の主柱穴にあたるのではないかと思われる。

また、本年度は石囲炉の内部の調査を行った。炉内からは多数の土器片と土器底部が出土し、焼土が底面に広がるように検出された(写真15)。石囲炉内から出土した炭化物を採取して、(株)加速器分析研究所に^{14}Ｃ年代の測定を依頼中である。その測定結果については、来年度の概報で報告したい。

ＳＷＵ－ＰＪ３号住は、これまでの調査の結果、東西約7.8ｍ×南北約7.5ｍの略円形のプランを呈し、住居内に石囲炉と底部穿孔倒置深鉢形土器をもつ大形の竪穴住居址であることが判明した。時期はこれまでに出土した遺物や、底部穿孔倒置土器から判断して、中期後葉・曽利Ⅲ式期に相当するものと思われる。

なお、底部穿孔倒置深鉢形土器を検出した４号土坑の北側に置かれた平石(鉄平石)の帰属時期がこれまで問題となっていたが、今年度、この平石を除去したところ、下面にＰ２とした柱穴が確認されたため、住居址に伴うものではなく、住居址上面に確認されていた中世末～近世初頭の１号道路状遺構の下底面に伴うものであると最終的に判断するに至った。

(高野　舞)

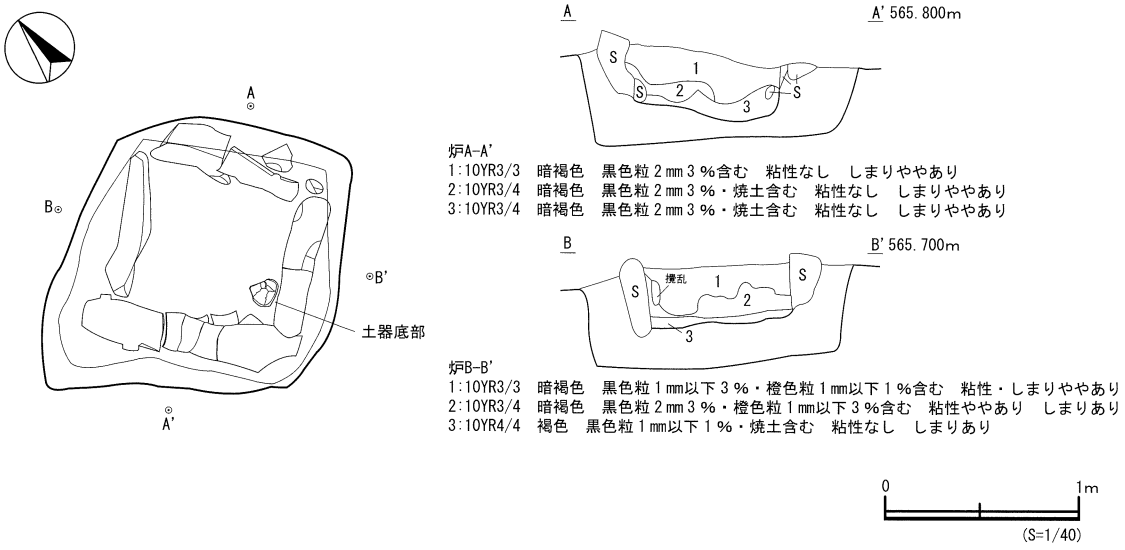


図８　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　石囲炉址 平断面図(1/40)

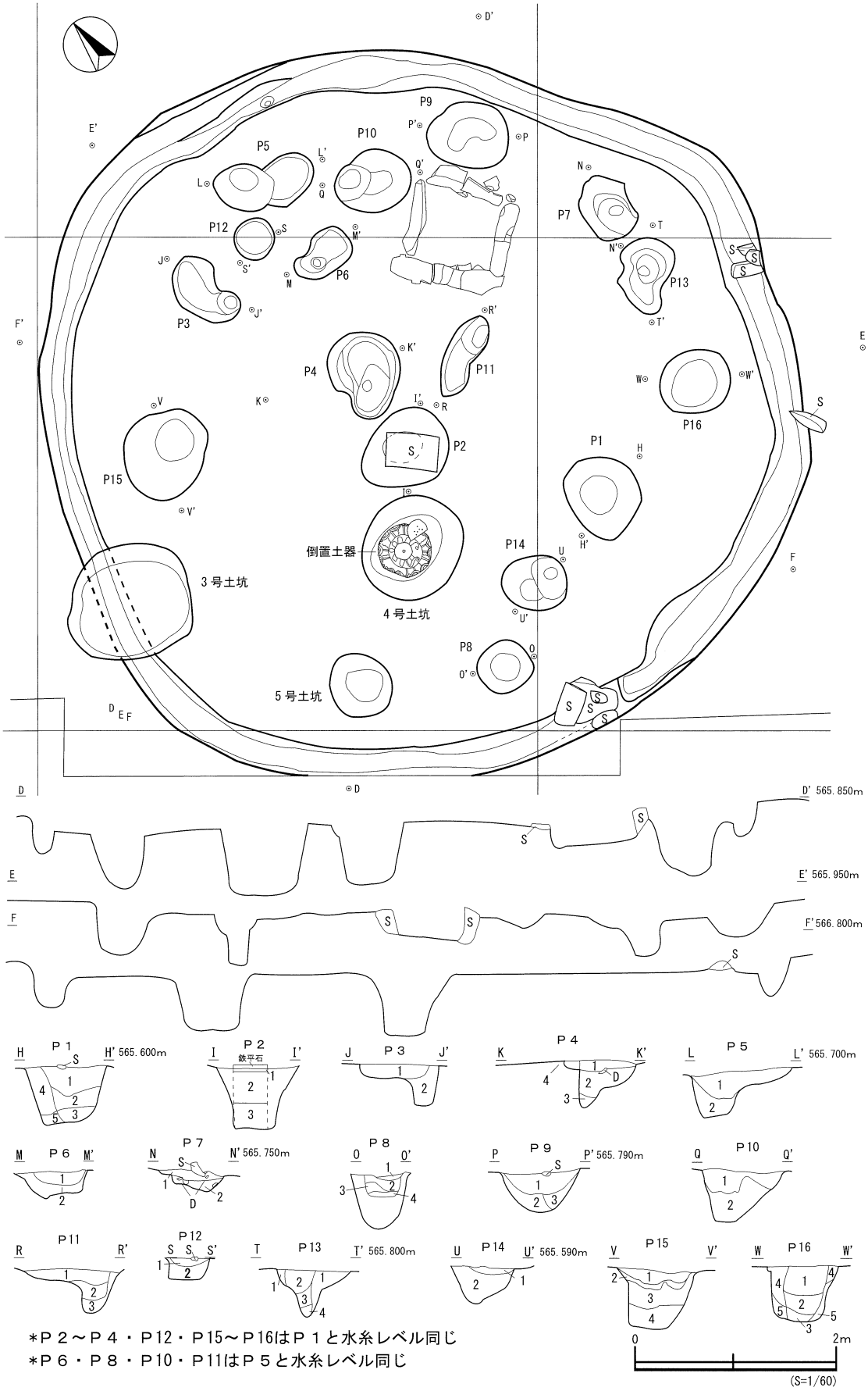


図９　ＳＷＵ－ＰＪ３号住 平断面図(1/60)

ＳＷＵ－ＰＪ３号住土層注記

P1
1:10YR3/4　暗褐色　粘性・しまりややあり
2:10YR4/4　褐色　粘性・しまりややあり
3:7.5YR4/4　褐色　1㎜以下の黒色粒５％含む、粘性・しまりあり
4:10YR4/3　にぶい黄褐色　粘性なし・しまりややあり
5:7.5YR3/4　暗褐色　粘性・しまりあり

P2
1:10YR4/3　にぶい黄褐色　粘性・しまりなし
2:10YR4/6　褐色　粘性・しまりなし
3:10YR3/4　暗褐色　粘性強い　しまりややあり

P3
1:10YR3/3　暗褐色　1㎜以下の１％黒色粒含む、粘性なし、しまりややあり
2:10YR4/4　褐色　粘性なし・しまりあり

P4
1:10YR4/4　褐色　粘性なし、しまりややあり
2:10YR4/3　にぶい黄褐色　粘性なし、しまりややあり
3:10YR3/4　暗褐色　1㎜以下の橙色スコリア粒５％含む、粘性・しまりあり
4:7.5YR4/3　褐色　1㎜以下の黒色粒３％含む、粘性・しまりなし

P5
1:7.5YR4/3　褐色　1㎜以下の橙色スコリア粒３％・黒色粒３％含む、
粘性・しまりあり
2:10YR4/3　にぶい黄褐色　1㎜以下の橙色スコリア粒５％含む、
粘性ややあり、しまりあり

P6
1:10YR3/4　暗褐色　1㎜以下の黒色粒５％含む、粘性ややあり、しまりあり
2:10YR4/6　褐色　1㎜以下の黒色粒７％含む、粘性なし、しまりあり

P7
1:7.5YR4/4　褐色　粘性なし、しまりややあり
2:7.5YR3/3　暗褐色　粘性ややあり、しまりあり

P8
1: 10YR4/3　褐色　1㎜以下の橙色スコリア粒５％・黒色粒３％含む、
粘性・しまりなし
2: 10YR3/4　褐色　粘性あり、しまりややあり
3: 7.5YR3/3 暗褐色　1㎜以下の黒色粒３％含む、粘性・しまりあり
4: 10YR4/4　褐色　粘性あり、しまり３層よりあり
5: 10YR3/4　暗褐色　粘性強い、しまりややなし

P9
1: 7.5YR3/4 暗褐色　粘性なし、しまりあり
2: 7.5YR3/3 暗褐色　1㎜以下の黒色粒１％含む、粘性ややあり、しまりあり
3: 7.5YR4/3 褐色　1㎜以下の黒色粒３％含む、粘性なし、しまりあり

P10
1:10YR3/4　暗褐色　粘性ややあり、しまりあり
2:10YR4/6　褐色　粘性なし、しまりあり
3:7.5YR4/3　褐色　粘性・しまりあり

P11
1:10YR4/6　褐色　粘性なし、しまりあり
2:10YR3/4　褐色　粘性なし、しましあり
3:7.5YR3/4　暗褐色　粘性ややあり、しまりあり

P12
1:10YR3/4　暗褐色　1㎜以下の黒色粒５％含む、粘性なし、しまりあり
2:10YR3/3　暗褐色　1㎜以下の黒色粒５％含む、粘性ややあり、しまりあり

P13
1:7.5YR4/6褐色　粘性ややあり、しまりあり
2:10YR3/3　暗褐色　1層より粘性・しまりあり
3:10YR3/4　暗褐色　1㎜以下の黒色粒３％含む、粘性・しまりあり
4:10YR4/4　褐色　1㎜以下の黒色粒３％含む、
3層より粘性あり、しまりあり

P14
1:10YR4/3　にぶい黄褐色　1㎜以下の橙色スコリア3%含む、
粘性なし、しまりややあり
2:10YR4/6　褐色　粘性なし・しまりややあり

P15
1:10YR4/4　褐色　1㎜以下の橙色スコリア粒１％含む、
粘性なし、しまりあり
2:7.5YR4/4　褐色　1㎜以下の黒色粒１％含む、粘性ややあり、しまりあり
3:10YR3/4　暗褐色　1㎜以下の黒色粒３％含む、粘性ややあり、しまりあり
4:10YR4/3　にぶい黄褐色　2㎜以下の黒色粒１％含む、粘性・しまりあり

P16
1:10YR4/4　褐色　白色粒１㎜以下７％・黒色粒１㎜以下３％含む
粘性・しまりなし
2:10YR3/4　暗褐色　黒色粒１㎜以下10%・橙色粒１㎜以下２％含む
粘性なし　しまりあり
3:10YR3/3　暗褐色　黒色粒１㎜以下10%・橙色粒１㎜以下１％含む
粘性ややあり　しまりあり
4:7.5YR4/4　褐色　黒色粒１㎜以下３％・白色粒１㎜以下３％含む
粘性なし　しまりややあり
5:10YR4/3　にぶい黄褐色　黒色粒１㎜以下３％・橙色粒１㎜以下３％含む
粘性ややあり　しまりあり

写真13　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　遺物出土状態

写真14　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　南側から

写真15　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　石囲炉址

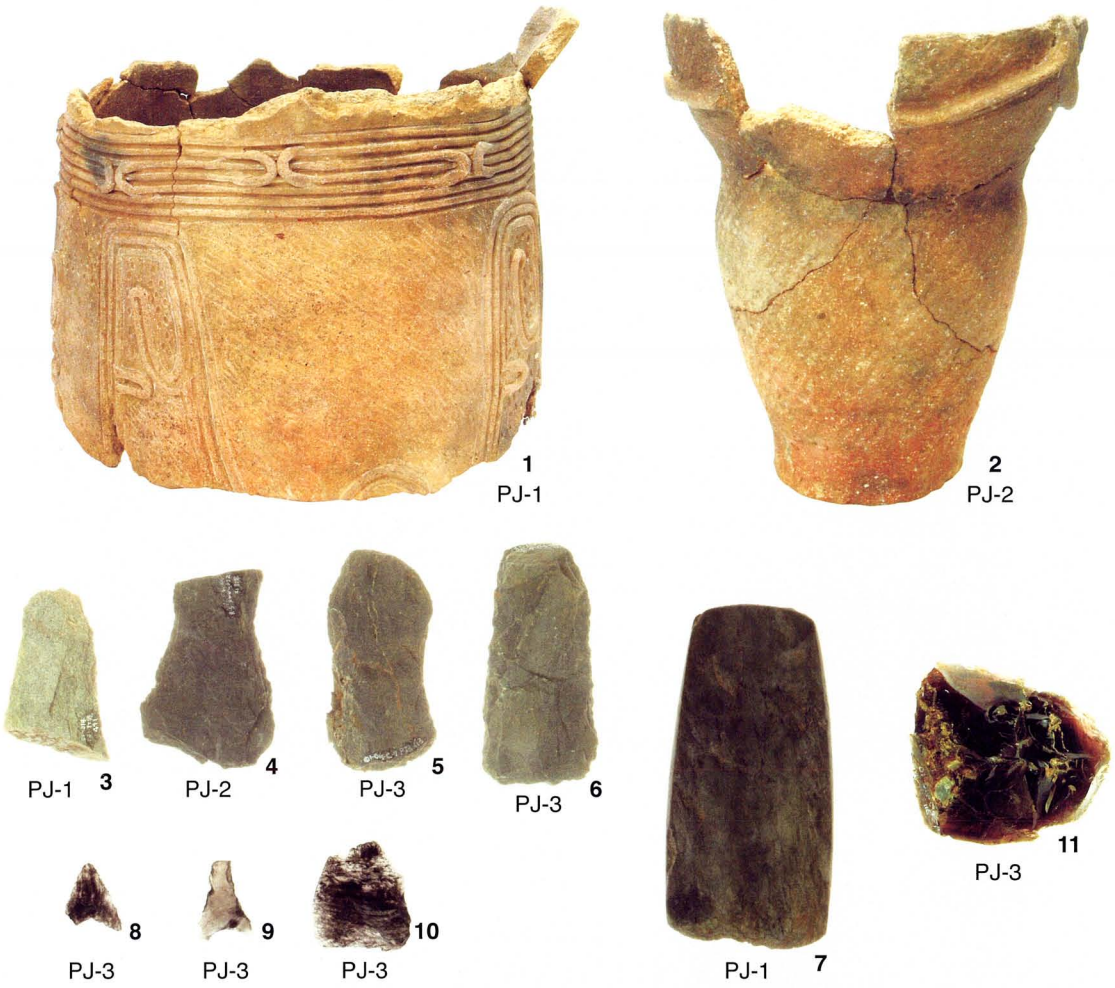


写真16　出土遺物

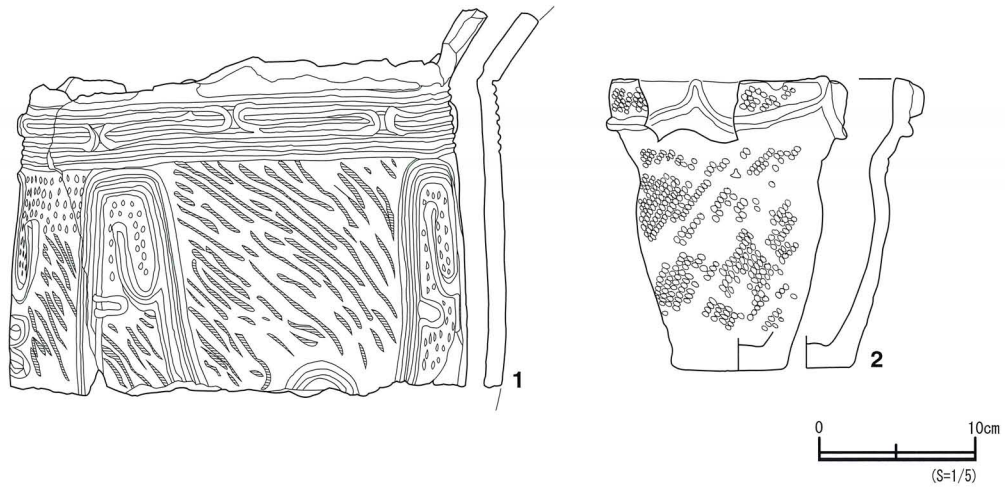


図10　出土遺物　１：ＰＪ－１号住埋甕、２：ＰＪ－２号住 石囲炉址内出土(1/5)

５．ま と め

2007年夏以来、毎年夏季休暇を利用して実施してきた諏訪原遺跡の発掘調査も、これまで対象としていた調査地区を含めて、広範囲にわたって土地改良事業が計画されたことにより、本年度の第５次調査をもって調査対象地区の調査は終了することとなった。発掘調査を開始した８月２日の時点では、すでに、これまで調査してきた調査対象地区の南半部も、北杜市教育委員会による事前調査が実施されていた。

本年の調査は、これまで検出されてきた遺構の完掘を目指し、調査経緯でも触れたように、調査区を拡張して実施した。その結果、ＳＷＵ－ＰＪ１住は、ほぼその全体のプランが確認された。これまで不明であった炉址は、Ｐ２・12に検出された焼土面が可能性の高いことが明らかとなった。また、今回の調査で最大の成果は東壁の周溝中から埋甕が検出されたことである。この結果、本住居址の時期が曽利Ⅰ式段階に相当することが明らかとなった。また、ＳＷＵ－ＰＪ２号住は北側に1.5m幅で拡張したところ、大形の石囲炉が検出された。これまで調査していた面よりやや高く検出されており、本来的には、この面が２号住の床面であったものと思われる。この住居址は、これまでの調査から、器台形土器の検出や不整形の土坑や井戸尻式期の土器を出土する土坑が複雑に重複していることが判明していたが、今回検出された石囲炉内部から出土した小形深鉢形土器から、曽利Ⅱ式段階の住居址と判断された。住居址北側部分は北杜市教育委員会の調査のための駐車場への通路部分に相当したため、プラン全体を確認するに至らなかった。ＳＷＵ－ＰＪ３号住は検出された柱穴の覆土全截と石囲炉の内部調査ならびに、周溝の調査を行い、プラン全体の発掘調査を完了することができた。2008年度に検出された底部穿孔倒置深鉢形土器から、曽利Ⅲ式期の住居址と考えられる。

このように、本年度の調査により、これまで確認されてきた遺構の調査をほぼ終了することができた。５次にわたる調査により大きな成果をあげることができたのも、北杜市教育委員会の暖かいご指導・ご協力があったからであり、あつく感謝する次第である。また、長きにわたる発掘調査に対して快くご承諾いただいた、土地所有者の村田勝海氏にも、この場を借りてあつく御礼を申し上げたい。来年度は、これまでの調査区の道路を挟んだ西側隣接地を対象として調査を実施する予定である。この対象地区は、北杜市教育委員会(合併前の明野村教育委員会)により確認調査が実施され、重複する住居址群等が確認されており、来年度の調査成果が大いに期待されよう。今後とも調査を継続してゆきたい。　　(山本暉久)

写真17　調査風景　西側から

写真18　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　石囲炉調査風景

調査参加者名簿

教　　員　山本暉久(大学院生活機構研究科教授)・小泉玲子(人間文化学部歴史文化学科准教授)

助　　手　石井寛子(人間文化学部歴史文化学科)

大学院生活機構研究科修士課程修了生　大野節子(世田谷区教育委員会調査員)
石川真理子(松本市教育委員会)

大学院生活機構研究科修士課程　**２年**　鑑田夏実・髙野　舞、**１年**　井口真理子・飯島　萌

人間文化学部歴史文化学科 学生

４年　市村有紀子・齋藤珠緒・佐藤　薫・佐藤未幸・小林寛子

３年　酒井貴美子・関根　藍・會田成美・清水志保・中村美結紀

２年　石下翔子・岡田真実・片柳里麻・鈴木英里香・田中文子・高田夏帆・野崎　恵・前田有美
渡辺瑞季

１年　酒井美妃・鈴木　花・福島唯奈・芹沢優妃・堀端真帆

写真19　前半参加者記念写真

写真20　後半参加者記念写真

諏訪原遺跡関連文献

佐野　隆　1996「発掘調査速報　諏訪原遺跡」『年報－平成７年度－』北巨摩郡市町村文化財担当者会

佐野　隆　2003「発掘調査速報　諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古－平成14年度年報－』北巨摩郡市町村文化財担当者会

佐野　隆　2004「発掘調査速報　諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古－平成15年度年報－』北巨摩郡市町村文化財担当者会

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科　編　2007『山梨県北杜市明野町上神取　諏訪原遺跡発掘調査概報2007年度』

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科　編　2008『山梨県北杜市明野町上神取　諏訪原遺跡発掘調査概報2008年度』

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科　編　2009『山梨県北杜市明野町上神取　諏訪原遺跡発掘調査概報2009年度』

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科　編　2010『山梨県北杜市明野町上神取　諏訪原遺跡発掘調査概報2010年度』

報告書抄録

ふりがな	やまなしけんほくとしあけのまちかみかんどり　すわはらいせきはっくつちょうさがいほう
書名	山梨県北杜市明野町上神取　諏訪原遺跡発掘調査概報　2011年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	山本暉久・小泉玲子・大野節子・鑑田夏実・髙野　舞・井口真理子・飯島　萌
編集機関	昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科
所在地	〒154-8533　東京都世田谷区太子堂1－7　昭和女子大学　　TEL 03-3411-5373
発行年月日	西暦　2011年12月15日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
すわはらいせき 諏訪原遺跡	やまなしけんほくとしあけのまちかみかんどり１５５８－１	19-209	01-014	35度 48分 ２秒	138度 26分 37秒	20110802 ～20110813	約150㎡	縄文時代環状集落址形成～崩壊過程の研究にかかる学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諏訪原遺跡	集落址	縄文時代	竪穴住居址３・中世道状遺構２	縄文土器・土製品 石器	縄文時代中期の大規模環状集落址で、2007年度より、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科が調査主体となって、中期環状集落形成～崩壊に至る過程解明のため、学術発掘調査を継続してきた。本年度は、縄文時代中期の竪穴住居址３軒の継続調査等を実施し、ほぼ調査を完了することができた。本年度の調査をもって、これまで継続してきた対象調査地区の調査は終了することとなった。

ＳＷＵ－ＰＪ１～３号住居址

山梨県北杜市明野町上神取
諏訪原遺跡発掘調査概報
２０１１年度

発行日　2011年12月15日
発行者　昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科
〒154-8533　東京都世田谷区太子堂１－７
TEL　03-3411-5373
FAX　03-3411-7059
印刷　野崎印刷紙器株式会社